

創立136年目の快挙

応援団抱き合い歓声



新しい歴史の扉が開いた。第83回選抜高校野球大会第5日の27日、城南、学校創立136年目1試合で報徳学園(兵)の快挙に、生徒や卒業生らでぎっしり埋まったアルプススタンドは沸きに沸いた。

九回裏、報徳最後の打者の打球が柳川慶太遊撃手のグラブに収まると、応援団の全員が抱き合ったり、メガホンを打ち鳴らしたりして喜びを爆発させた。甲子園で勝って流れる初めての校歌。誇らしげに肩を組み、高らかに歌い上げた。



勝利の瞬間、歓声を上げて喜ぶ城南高校の生徒ら—甲子園球場

「甲子園に出場してくれただけで十分なのに、ここまで頑張ってくれるとは」。同窓会関東支部「渦の音クラブ」の船越健介副会長(56)は千葉県佐倉市は感激の表情。首都圏は東日本大震災の影響で、停電や物資不足などが続いているが「選手たちの頑張る姿を見て、私たちも元気をもらった」。

スタンドには全国に散らばる城南卒業生が集結し、あちこちで「にわか同窓会」の様相に。19

校歌作詞者で第1回卒業生

山口さん(徳島市出身)



城南高校のアルプススタンドでは、同校の校歌を作詞した翌年の1950年制第1回卒業生の山口義広さん(79)は京都府長岡京市在住、徳島市出身、写真も観戦し、初めて甲子園に流れる選られた。作曲は作曲家の故郷、初めて甲子園に流れる選られた。作曲は作曲家の故郷、初めて甲子園に流れる選られた。

「一度は甲子園で」感無量
校歌を感無量の面持ちで聞き入った。

「一度、甲子園で校歌を聞いてみたいとずっと願っていた」と山口さん。「選手たちの頑張りや校歌を甲子園に連れてきてもらった。しかも勝って聞けるなんて。うれしくて涙が出そうです」と感動していた。(河野隆富)

62年卒業の同期約20人で応援した寺岡武彦さん(67)は兵庫県西宮市は「これだけ打ってくれると盛り上がる。これからみんなで祝勝会です」と喜んでいました。

試合は四回に城南が先制。その後も自慢の打力を生かして中押し、ダメ押しと城南にとって理想的な展開になり、応援団やチアガールは大忙し。ブラスバンドの演奏が禁止されたため、応援団は各選手のテーマ曲を声を張り上げて歌い、応援を先導した。

3年の中川奉(とも)君は「声がかれそうになったが、絶対勝つてくれると信じていた」。2年でチアガールの桑田なつみさんは「甲子園がこんなに楽しいなんて」と笑顔を見せた。(河野隆富)

徳島新聞社は27日、城南高校が1回戦を突破したことを伝える電子速報約千部を発行し、徳島駅前や新町川ボードウォーク、城南高校周辺などで電子速報は「城南 甲

城南の校歌は現在の校名に定。歌詞は生徒や教職員から公募し、投票の結果、約30作品の中から山口さんの作品が選ばれた。作曲は作曲家の故郷、初めて甲子園に流れる選られた。

「一度、甲子園で校歌を聞いてみたいとずっと願っていた」と山口さん。「選手たちの頑張りや校歌を甲子園に連れてきてもらった。しかも勝って聞けるなんて。うれしくて涙が出そうです」と感動していた。(河野隆富)

打撃の試合、本塁打勝利。園を相対「紀梓」といって、中での明かせま、災とい、新町山、市「と、で速報、市那賀、員村上「まさ、は、次で、話した。